セッススするまで出られまテン

セッススするまで出られまテン♡

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20647839

R-18, モ腐サイコ100, ♡喘ぎ, 濁点喘ぎ, おほ喘ぎ, 3P, 大人組, 芹エクサンド, 芹エク霊, 軽度の大スカ

軽度の大スカです！（手順を省略してるので、このまま真似しないでください）師匠受けで３Ｐです。芹エクサンドです。♡喘ぎ、濁点喘ぎ、おほ喘ぎ、二輪刺しがあります。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

セッススするまで出られまテン♡

セックスしないと出られない部屋に閉じ込められた。

俺と、エクボと、芹沢の３人で。変な部屋がいつの間にか増えた、と口ごもるラブホのオーナーからの依頼だった。
「超能力とかで壊せたりは……」
「駄目だな、人の想いが形になって都市伝説としてめちゃくちゃ力を持ってる。条件を満たした方がはやい」
吉岡さんに憑依したエクボが部屋を調べながら言う。
「仕方ねぇ、霊幻、ぱぱっとヤっちまうぞ。芹沢、耳塞いで目ぇ閉じとけ」
「は！？ぱぱっ、って」
「仕事のことはお前の責任だろうが。芹沢に何かさせる気か？」
「うっ……」
「ほぐしたり準備するから、風呂場来い。怪我したくねぇだろ」
「……分かった」
脱衣所に向かおうとする俺の腕を、芹沢がぎゅっと掴む。
「待ってください。俺が霊幻さんとヤります」
「は？」
「俺の、俺の目の前で霊幻さんが他の男に抱かれるなんて、我慢できない」
「せりざ、」
「好きです、霊幻さん」
はああああああああああああ！？
「お願いです、俺に抱かせて」
硬直する。他人にストレートに告白されたのは初めてだ。ぐるぐると色んなことを考えてしまう。俺は芹沢に対してそういう気持ちは無い。今のところ。どう上手に振ろうか、仕事と人間関係に支障が出ないように……じゃなくて、えっやんの！？俺を好きだと言ってる奴と！？！？
「お、俺を好きなら、ヤるのは問題があるんじゃないかな……」

「霊幻さんを何とも思ってない男とヤる方が問題があるんじゃないですか？」
それはそうだ。
「だけどほら、後腐れとか……！」
「今回のことを理由に、付き合いを迫ったりしません。不可抗力ですから。でも、好きでもない人と霊幻さんが抱き合うのを見たら、俺は我慢できない。エクボくんを消してしまうかも」
う、と俺は推し黙る。エクボを消されるのは困る。
「……分かった。お互い今日のことを忘れるのを条件に、お前と──」
「ちょっと待て。あー、」
エクボが舌打ちしながら頭をかく。
「その、だな。……霊幻、俺様も、お前が他のやつとヤるのは嫌だ」
「……はぁ！？」
「要は、まあ、そういうことだ。……霊幻、俺様とヤるのは嫌か？」
ずるい訊き方するんじゃねえ！！
「えっエクボ俺のこと好きなの？」
「……まあ、認めたくはないが」
「なんなんだよ！！」
「霊幻さん……俺とエクボのどっちとヤるんですか？」
「何で突然究極の２択を迫ってくるんだよ！！もうお前らでヤればいいんじゃね！？」
「勃たないです」
「勃たねえな」
「んもおおおおおおお！！！！」
「俺様、お前が芹沢を選んだら、うっかり芹沢を呪っちまうかも」
脅してくんなよ、上級悪霊！！
「エクボくんを消したくは無いです……」
子犬のふりして容赦ねぇな！？元５超！！
どっちも！！そういう目で見た事がねぇーよ！！！！
人生で選びようが無い２択を迫られた時。

「うーん、俺、浮気者でさあ。実は、２人とも好きなんだよ」
俺は、なんとか抜け道の第３の選択肢を探すタイプである。
「「は？」」
「俺的にはどっちでもいい。じゃんけんで負けた方がチンコ貸してくんない？」
ほら！！！！
クズだろ！！！！
幻滅しろ！百年の恋も醒めろ！！
「霊幻、お前そんな奴だったのか……」
「ショックです……」
だろ！？嫌々抱け！
「まあ、それはそれで興奮するが……」
「俺も、ふしだらな霊幻さんの妄想はレギュラーですし……」
はあ！？！？！？！？
「俺様もお前の彼氏になってやるよ、感謝しろ」
「俺もまあ、彼氏でいいですよ」
なんだその謎に上から目線の結論！！おかしいだろ！！
「そうと決まれば、じゃんけんで順番決めようぜ。勝った方が先な」
ああああ……俺の処女喪失がじゃんけんで決まる……。
「負けちゃった。２番目か。まあいいや、童貞を霊幻さんで捨てれるならどうでも」
えっ……俺初めてで２人相手すんの……？ハードすぎない……？
「じゃあ改めて、洗浄しようぜ」
「……分かった。器具はこれか……」
ああああ、察しがいい自分が恨めしい……。
「は？お前後ろゆるゆるなんだろ？シャワ浣じゃ不十分だろ。こっち使えよ」
エクボにイチジク浣腸を差し出されて顔が引き攣る。
「ほら、四つん這いになれよ。挿れてやるから」
「いやいい！自分でやる……ひっ！？」
無造作にベルトを抜かれてズボンと下着を下ろされて、情け無い悲鳴が出た。

「俺様、前戯からキッチリ楽しみたいタイプだから」
エクボはベロリと欲情に粘つく唾液を中指に絡めて、俺のアナルをグニグニと揉む。
「そんっ、なとこ……きたない、から……」
「んなこと言ってたらアナルセックスなんて出来ねえだろ。大丈夫だって、めちゃくちゃ衛生的に問題あることはしねえから。……よし、ほぐれてきたな」
ぐぐぐ、と細いものが挿入される。排泄感。
「ぁ、っ……」
「息吐いてろ。ゆっくり薬剤入れるから」
「……っ、う……」
すごく、トイレ行きたい。
便秘でも無いのにされる浣腸、腹痛くなる。
「いた、ぁ……っ！と、といれ……」
「だぁめだって、３分我慢しろ」
エクボはベッドにバスタオルを引いて、その上に俺を座らせる。
「口開けろ」
「？……っん！」
腹の痛みに気を取られて、素直に口をかぱっと開けたら、エクボにキスされた。
うわー、俺のファーストキス……。
「ぁ、っん！ん……、ん、っ！」
えっ何！？生き物みたいにエクボの舌が入り込んできて、ぞくぞくぞくぅっ♡って身体が震えた。
エクボ、キス上手いな！？！？
「ん……ん……♡」
くちゅくちゅと頭蓋骨に響く音のいやらしさに、煽られる。思わずエクボの首に腕を回して、『もっと』と後頭部を掴んで引き寄せてしまう。
「積極的だねえ」
ギラギラと興奮に目を鈍く光らせるエクボが、我慢できないと言いたげにちろりと唇の端を舐める。
──喰われる。

ぞく、と倒錯的な悦びに背骨がむずむずした。
「ねえ、俺も」
芹沢に強引に左を向かされて、首がぐきってなった。
「ん……ッ」
熱い。溶けるようだ。ただ俺をむさぼろうとする唇が、息をつかせる暇もなく重ねられる。酸欠で頭がぼうっとしてくるが、ただひたすらに求められるのが気持ちいい。
「──時間だ」
エクボの冷静な声に腹痛を思い出す。芹沢を押し退けてトイレに走った。
便器に座ってほっとしたのも束の間。
「……いやドア閉めてくれよ」
トイレのドアを全開にして、エクボと芹沢が立っている。
「気にせずひり出せ。洗浄してやっから」
カテーテルとシリンジを持ったエクボが、お湯の温度を確かめながら言う。
「俺、人がうんこしてる所見るの初めてです」
「俺だって見せるの初めてだし見せたく無いんだが！？！？ほんとに、出て、って、くれ……！」
腹が痛い。腹が痛い。腹が痛い。腹が痛い。
も、早く出したい……ッ！
「泣くなよ、可愛いなぁ……」
「痛ぇーんだよ！！頼むから、出て……ッ！あ、っ……！」
音。におい。視線。
──あまりの屈辱に、ぽろぽろ涙が溢れた。
震える手で水を流す。少しでも痕跡を消したかった。
「……ッ、出てって、くれよぉ……っ！」
「可愛いです、霊幻さん、泣かないで」
「いっぱい出たな〜。ウォッシュレットしたか？次はお湯浣するから、ほら、ケツこっち向けろ」
俺は排泄の衝撃でガクガクする足に力が入らないことを、睨み付けてエクボに知らせた。
「……芹沢、支えてやれ」

「命令しないでよ。……こう？」
俺は芹沢に引っ張られて、トイレの貯水タンクに抱きつき、尻を突き出す姿勢にされた。
「まあ最初は５００ｃｃってとこかな……」
エクボがカテーテルの端にベビーオイルをつけて、するするとアナルに挿入した。
「しっかりケツの穴締めとけよ？クソした後はゆるむからな」
かっ、と顔が赤くなる。エクボの目の前にケツを突き出して粗相だけはしたくない。
「ん、〜〜〜〜ッ」
しょろしょろと音を立てて腹の中にお湯が流し込まれる。じわ、と腹の中に熱い感触が広がっていって、妙な気分になってきた。
「お湯浣ってめちゃくちゃ中出しされてる時と同じ感じらしいな。……なあ、感じるか？」
「うるっ……さ……！はぁ、うっ……！」
……へえ、中出しされるってこんな感じなんだ……。
そう意識すると、ますます変な気分になる。腹の中からぽかぽかして、心地いい。
「……ッ、出る……ッ！」
「おー、出せ出せ」
「っだからあっ、出てけって……！」
慌てて便器に座ってドボドボ湯を出す。
……うわ、めちゃくちゃスッキリすんな……。
身体の中からキレイになる錯覚。ぶる、と俺は震えた。
「まだ色付いてんな。もう一回やるから、尻突き出せ」
「……」
水を流して、俺は大人しく尻を差し出す。ぐったりして抵抗する気力が無くなってきたのもある、が。
（出す感覚が気持ちいい……）
「ン……」
しょろしょろと腹にお湯が注ぎ込まれて、うっとりしてしまう。
「わ、お腹ぽっこりしてて、妊婦さんみたいですね」
「……っ、さわんな……ッ」

芹沢に撫でられて、ギョッとした。
押されて、漏れそうになったからだ。
「は、ッ、出てけ、って……！」
また便器に座って流し出す。
「ン、ッ……♡」
「お前、うんこして気持ち良くなっちゃったのか」
またお湯を流し込みながら、器用に半勃ちの性器をエクボに握られてギクリとした。
「だ、って……ぇくぼが……っあ♡」
「えっちですね、霊幻さん」
エクボが手コキする上から、芹沢のゴツゴツした指がくちゅくちゅと鈴口をいじってくる。
「ゃっ♡やめっ♡あぁああぁンっ♡♡♡」
慌てて便器に座って、びしゃびしゃと垂れ流しながら射精した俺は、訳が分からなくなっていた。
え……？俺、うんち漏らしてイったの……？
「はっ……♡はひっ……♡」
「よしよし、キレイになったな。スッキリしたな〜、霊幻？」
エクボが水を流す。俺は何とか性器をくちゅくちゅ捏ねる２つの手を外して、立ち上がる。
震える足で、よろよろと入り口の扉に向かって……ドアノブをガチャって、がっくりした。
「往生際が悪いぜ」
ため息をついたエクボと芹沢に引きずられてベッドに投げられる。
「や、やだっ」
何でこんな目に……。
「まずは、チンコが挿入るようにしねえとなあ？」
「ヒッ」
エクボがローションを練って、ズボズボと指をアナルに突っ込んでくる。
「セッ……クスって、アナルセックスでもいいなら、オーラルセックスでもいいんじゃねぇかよぉ……」
情けねえ。涙声になる。鼻が詰まって、苦しい。

「お、じゃあ試してみっか。芹沢、チンポ出せ」
う……
そっか、フェラすることになるのか……
やだなぁ……でもケツに突っ込まれるよりはマシか……
「ちょっと待って、ちんこ洗ってくるから」
バタバタと芹沢が風呂場に行って、すぐ戻ってくる。下半身裸、上半身スーツという奇妙な格好で。
「お、お願いします」
期待でギンギンじゃん……。
デカ……。
俺は渋々と、エクボの指を後ろに入れたまま、四つん這いになる。
「ん、っ……」
ぐりゅっ♡ってエクボの指が中をえぐって、変な声が出た。
枕元にあぐらをかいた芹沢の性器に恐る恐る触れる。
うわー、他人の性器がフル勃起してるの見るの、初めてだわー……。
「れぃ、げんさん……あんまり触られると、出ちゃうんで……」
おそるおそるヤワヤワと触っていただけだが、芹沢には十分な刺激になってしまったらしい。
血管がビキビキ言ってる御立派を、俺はパクっと先端だけ咥えた。
……にっが！！！！！！！！！！
これ！！石鹸の味だ！！お前、ちゃんと流さなかったな！？！？！？！？
「おまっ……！！」
「おいおい霊幻、ちゃんと咥えてやれよ」
ごっ、と。
「〰〰〰〰！？！？！？！？」
エクボに頭を押さえられ、喉奥まで一気に突かれた。
「オーラルセックスっつうぐらいなんだからよお？ちゃあんと奥まで犯されなきゃあセックスにならねえだろお？」
「ごっ！んぉっ！おっ♡んっ……♡」
無理矢理エクボに、頭をオナホみたいに使われる。
鼻が詰まってるから、息が出来ない……っ♡

ゴリゴリと喉を突かれる度に、危機感でバグったチンコが先走りをタラタラ垂らす。
つまり。
「んぉ……っ♡」
じゅぶじゅぶ♡ごっごっ♡とお口を犯されて、俺はすっかり気持ち良くなってしまっていた。
ぐやじい……っ！何で気持ちいいんだよぉ……っ♡
「エクボくん……ッ！で、出るッ……！」
「おー、早く出してやれ。口おかしくなるからな」
びゅるるっ、と大量に口オナホに射精されて、鼻から芹沢の精液が出た。
「ぅえ゛……っ♡」
鼻通ったあっ♡らっきぃっ♡
「あっダメですよ、霊幻さん！飲んで」
吐き出そうとした口を、天然ドＳの手が塞ぐ。
「ちゃんとセックス感出さないと。飲んだらイチャイチャしてる感じ出るじゃないですか？ほら、ごっくん」
「ん、ッ……」
俺は顔をしかめながら、頑張ってごっくん♡した。
こ、これで、ドア開いただろうか……？
俺はヨロヨロとドアに向かう。
ガチャる。
開かない。当然鍵はかかって無いのに。
「あー、やっぱ駄目か」
エクボが分かってたみたいに言う。
なら！！
言えよ！！
俺イラマし損じゃねえか！！！！
「ほらほら、ベッドに戻って来いよ、霊幻。ここにおしりぺったんしろ」
腹立つからやめろ、幼児言葉使うの！！
「これはお前のためでもあるんだぜ？お前、クソしながらイってただろ？」

観念して仰向けになった俺の尻をくちくちと弄りながら、妙に優しげな声でエクボが言う。
「これからクソする度にイくの嫌だろ？そんなド変態には成りたかねえだろ？」
「それは、まあ……」
「だから、『ケツはチンコを突っ込まれてイく所』って俺様たちが、身体に教え込んでやるよ」
「なるほど……いやちょっと待ておかしぃ……ッあぁああぁ♡♡♡♡」
ケツの中で指がバラバラに動いて、何度もぴゅっぴゅっと精液が俺のちんこから噴き出す。
「んん？前立腺に当たってんのか？分かりにくいな……」
「やめっ♡もうクチュクチュすんなぁっ♡」
エクボが内部を探る指が痛痒くて、とにかく気持ちいいのだ。
痒いところを思いっきり掻いてるような、神経を直接掻いてるような気持ち良さ。
たぶん、俺のケツ、馬鹿んなってる。
「Gスポみたいな感じじゃなくて、全体が気持ちいいのか……はーん……」
ニヤっと笑ってエクボがちゅぽんっと指を抜く。
「じゃあコイツで全体をゴリゴリしてやるよ」
うあああっ♡エクボのちんぽぉ……っ♡
芹沢のよりサイズは小さいが、しっかりとカリの張った魔羅に、ごきゅっと喉が鳴る。
あれでゴリゴリッ♡てして貰ったら、絶対気持ちいい……♡
「ほら、よ！」
「んァ゛っ♡」
ぐぽっ♡と先端が入って、ビクンと腰が跳ねた。
ごりごりごり、と内部をえぐりながら犯してくるチンコに、ぞわぞわぞわ、と鳥肌が立つ。
「んぁああ……っ♡」
「気持ちいいですか？霊幻さん……きくまでも無いか」
俺の顔を覗き込む芹沢の瞳に映る俺の目に、バッチリとハートが浮

かんでいて、笑ってしまった。
「えくぼぉっ♡搔いてぇっ♡ズボズボしてぇっ♡♡♡」
「焦んなよ、ナカ切れるぜ……！」
興奮にコメカミを引き攣らせながらも、エクボはじれったく、ゆっくりと腰を前後させる。
「んんんんんんっ♡♡♡」
目の前がぱちぱちする。
がくがくがくぅっ♡って足が震えて、脳がむずむずした。
「はぁっ、霊幻……」
覆い被さってくるエクボの唇を受け入れようとしたら、ぐいっと芹沢がエクボを押し戻した。
「ちょっと、上半身は俺のでしょ」
「……そうだったな」
そうだったの！？！？いつの間に役割分担したの！？！？
クチクチと芹沢が俺の口を指でかき回す。
なんか、乱暴にされると、ゾクゾクしちゃうな……♡
絶対に言わねえけど。
「あぐ、ん……♡」
舌を絡めはじめた所で、芹沢が指を抜いてしまって名残惜しい。
ず、ず、と俺を揺さぶるエクボの熱に、また意識が向く。
「あっ♡あっ♡……ッあ！？」
芹沢がぁっ♡俺のツバで胸くちゅくちゅってしたあっ♡
「ゃんっ♡はうっ♡あああんッ♡♡♡」
腰から下が力入んなくて、芹沢の指からっ、上手く逃げらんない……ッ♡
「ちくびっ♡ちくびやらあっ♡」
芹沢がぐっぐっと俺の乳頭を押す度に、ケツがきゅんっ♡きゅんっ♡って疼いてるのが分かる。
「ヨさそうだな？ええ？」
きゅんっ♡ってケツが締まった瞬間に。
ゴッ、てエクボのチンポが、俺のナカの変な所を穿った。
じぃんっ♡って下半身が痺れて、ずくずく波が襲ってくる。
「へ、あ……？」

「おっ、メスイキしたか」
「んお゛っ！？！？♡♡♡♡」
同じ場所をガスガスとエクボが容赦なく突いてくる。
「きもちいなあ？霊幻？」
「きも、きもちいいっ♡」
「チンポきもちいなあ？」
「ちんぽきもちいっ♡ちんぽさいこおっ♡♡♡」
きゅんきゅんとエクボのちんぽを締め付けて、卑猥な言葉を口にする。
口から堕ちてくぅ……っ♡
おくちからメスになるぅ……っ♡
「はっ♡はあっ♡アァッ♡」
「えっちだなあ……」
うっとりと呟きながら、芹沢が俺の乳首をカリカリと引っかく。
「うあっ♡ちくびきもちいっ♡カリカリやらぁっ♡」
あ♡あ♡あ♡
またアレが来るぅ……っ♡
「あ、っ…………あぁああぁあッ♡♡♡♡」
ばかっ♡ばかになるぅっ♡♡♡
「メスイキきもちーな、霊幻？」
「めすいきっ……ぎもぢいいっ……♡♡♡♡」
パンパンと激しくエクボが腰を打ち付け始める。ぐぽっ♡ぐぽっ♡って音がして、恥ずかしい……♡
「イくぞ、霊幻……ッ！」
「ん、ッ……♡」
びゅーびゅー、お湯みたいなの入ってきたあ……っ♡
「はっ、中出しされてイくとか、エロすぎ……ッ」
「は、ぇ……？」
びしゃびしゃと腹に射精してて、俺はなんだかよく分からなくて、へらっと笑った。
「早くかわってよ」
「わぁかってるよ。掻き出しておいてやろうと思ったんだが……悪い、奥で出したから出てこねえわ」

「そんなのいいから」
じれったそうに芹沢が俺の足元に移動する。
「霊幻さん……入れますよ」
くぷっ♡くぷっ♡と何度も入り口を浅くえぐったチンポが。
ずど、と挿入ってきた。
「ん゛お゛！？！？っ♡♡♡♡」
足がピンとなる。トコロテンみたいに、押し出されるみたいに、
びゅって射精した。
「ちんぽ……♡すごっ……♡」
アへる俺が気に入らないのか、エクボが……目を隠してきた。
「あっ！？えくぼ、なにしてっ……ん゛お゛お゛お゛っ♡♡♡♡」
ずずずずず、と奥まで芹沢が入ってくる。
こちゅ♡と行き止まりまできた。
「あ゛っ♡あ゛っ♡あ゛っ♡」
こちゅ♡こちゅ♡こちゅ♡と何度も壁を押されてイきくるう。
「すごっ……♡きもちい……♡」
あああチンポさいこうっ♡
ハマりそ……っ♡
「ん゛！？」
ぐ、と行き止まりが押される。
「も、少しッ……」
ぽた、と芹沢の汗が落ちてくるのに、焦る。
「おまっ、何……！」
ぐ、とエクボが腕を押さえた。

がぽっ♡♡♡♡♡♡♡

「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っ゛♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
行き止まりなのぉっ♡そこから入っちゃダメなのぉっ♡
「うわ、すげーきもちい……」
上擦った芹沢の声にひくひくと嗚咽が漏れる。
ちんこがずっと射精してるみたいだ。ちんこ壊れちゃった……
「はは、すごいな、ダラダラザーメンこぼしてますよ。下のお口も

べたべたに汚れてる」
うるっ♡さいっ♡
「ぁお゛っ゛♡お゛お゛っ゛♡」
ぐぽっ♡ぐぽっ♡って♡♡♡
ぎも゛ぢい゛い゛ッ♡♡♡♡
「うっ、出るッ……！」
「んお゛お゛お゛ッ♡♡♡」
も、お腹いっぱい……♡
「や、っと、終わったぁ……っ♡」
ひく、と笑った俺に。
「おい、挿れたままにしてろ」
エクボが冷徹に言い放った。
「な、何？なにっ？？？」
「足かかえたまま、横になれ。そう……俺様も挿れるから」
はあ！？！？！？！？
「なに、なに言ってっ」
「うん……これだけ広がるならいけるな。霊幻、」
ぐ、と入り口を無理矢理広げて。
「俺たちでないと満足できない身体にしてやるよ」
ずぐ、と二輪刺しされた。
「ん゛お゛お゛お゛お゛お゛ッッッッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
腹っ……裂けるっ……♡♡♡♡
「えー、エクボくんのと擦れるの嫌だなあ……」
「慣れろ」
芹沢が突いたら、エクボが引き抜く。
「あはぁああぁアァアッ♡♡♡♡」
交互にピストンされて、チカチカチカチカ目の前がスパークした。
「あぁあああぁあぁぁああんっっっっ♡しぬうぅううぅうっ
♡♡♡♡」
あたまばかんなるっ♡あたまばかんなるぅっ♡♡♡♡
「きもちいいな、霊幻？」
「ぎっ、ぎもちいっ♡ぎもぢいっ♡♡♡♡」
がくがくぶしゃぶしゃと潮を吹く。

「大好きですよ、霊幻さん」
「……愛してるぜ」
ごっ、と同時に奥を突かれて。
「俺もぉおおぉおおっ♡♡♡♡」
何故か俺は、そんなことを言って、イった。

※

「まー、これでお前は他の彼氏じゃ満足できなくなっただろ」
そうだな！そもそも他に彼氏いないけどな！（泣）
「霊幻さん、お付き合いできて嬉しいです」
ほにゃほにゃと笑う芹沢に絆されそうになる。いかんいかん、こいつ股間は５超（）だからな……。
「またやろうな、霊幻」
「またやりましょうね、霊幻さん」
２人から手を繋がれて、俺は……握り返して、しまった。

「ねえ、霊幻さんって……」
「しっ、黙っとけ。……そうだよ、処女だ、アレは」

終わり